

れない、心ある者はなぜかと反省せなければならぬわけでありませう。(中略) 両党の諸君にして、いやしくも悔悟反省して、よくなる道を開くならば、私は及ばずながら何時も死ぬまで縁の下の方持ちをいたします。(下略)

しかし政党は反省はみられず、ますます無気力となり、政府は翌十一年一月には軍部の強硬派に引きずられて、ロンドン海軍「軍縮」会議脱退の通告を發した。それからまもなく、二月二十六日には、青年将校が武装蜂起するといういわゆる二・二六事件が起こった。この日に襲われたのは時の首相だった岡田啓介君のほか齋藤実、高橋是清、渡辺錠太郎、牧野伸顯、鈴木貫太郎、西園寺公望の諸君で、そのうち齋藤、高橋、渡辺の三君は死亡した。奇異に感ぜられたのは死んだとみられていた岡田君の生存が二、三日後に發表されたことである。

岡田君がどうして生存しえたかは、その後も久しく世人の謎となっていたが、私は不思議にも岡田救出に間接の關係があつたため、まもなくその真相を知ることができた。それは長女清香の嫁している佐々木久二「福井県選出の代議士、実業家」が岡田首相と昵懇であつて「岡田は福井出身」、岡田君の救出に臨機な処置を講じた福田秘書官は、佐々木の推薦で岡田君の秘書官となり、岡田君の救出に用いた自動車は佐々木自身のものであつたし、岡田君が救出されてからかくまわれた家は佐々木邸であつたからである。

はじめ私も岡田君は死んだものと思つていたところが、娘の清香が「岡田さんは生きています」といふので、私は「どこにいるか」と聞くと「私の家にいます」といふ。あまり不思議なので脱出の経過を聞き、やがて岡田君にも会つた。その経過がまたおもしろい。佐々木は岡田首相と懇意であつたから、焼香だけでもしようと思つて、事件のあつた翌日か翌々日、自動車で官邸へ行つた。官邸の門前に車を置いて邸内に入り、そこに設けられていた祭壇に向かつて焼香して邸外に出ると、自分の自動車がない、誰かが乗つてしまつたらしい。佐々木はプリプリしながら外へ出て帰宅し、さつそくこのことを清香に話した。すると清香は「岡田さんはうちにいます」といふので佐々木は夢かとばかり驚いた。ところが清香のいうとおり実際に岡田君がいたので、二度ビックリした。

岡田君が生きていたのは事件が起こつたとき、彼は女中部屋の押し入れに逃げこみ、救出されるまで、女中から内密に食物を運ばせていたそうだが、いやしくも海軍大将である人物がそういう生きかたをしていたとは意外である。この事件の後、しばらくの間はさすがに岡田君もひどくしよげていて、私などの前でもきわめて慙懃で、肩身のせまい罪人のような態度であつたが、その後数年経つて会うと普通人のような態度に変わつていた。

### 辞世を詠んで演壇へ

二・二六事件後、岡田内閣の後を襲つて広田「弘毅」内閣が生まれた。広田内閣は大正二年山本「権兵衛」内閣が私どもの主張を一部容れて軍部大臣の任用制度を後備まで拡張した

のをふたたび現役制度に還元したり、ドイツとのあいだに防共協定を結びさらにイタリアを加えて三国協定とした。折から第七十議会が休会明けとなり、冒頭、浜田国松君と寺内「寿一」陸相とのあいだにいわゆる「腹切り問答」をめぐって解散論と非解散論が政府部内で対立し、広田首相はこれを收拾できず一月二十三日ついに辞職、大命は宇垣一成君に降下したところ、宇垣君は陸軍部内の反対で組閣できず、林銑十郎（陸軍大将）内閣が生まれた。私はこうした軍部の横暴を黙視することができなかつたから、起つて忠告を与えようと決意した。当時は率直に意見を述べれば暗殺を免れないという険悪な空気であつたから、友人からは「それは危ないからよせ」と戒められたが、私は壇上で殺されることを覚悟し、次の二つの辞世を詠んで、「昭和十二年（一九三七）二月十七日午後一時十五分に開かれた本会議において國務大臣の演説にたいする質疑の形式で二時間余の演説を試みた。

命にもかへてけふなす言説を

わが大君はいかに見たまふ

正成が敵に臨める心もて

我れは立つなり演壇の上

しかし壇上に襲われることもなく、その後右翼団体などからしきりに脅迫状が舞いこんだ

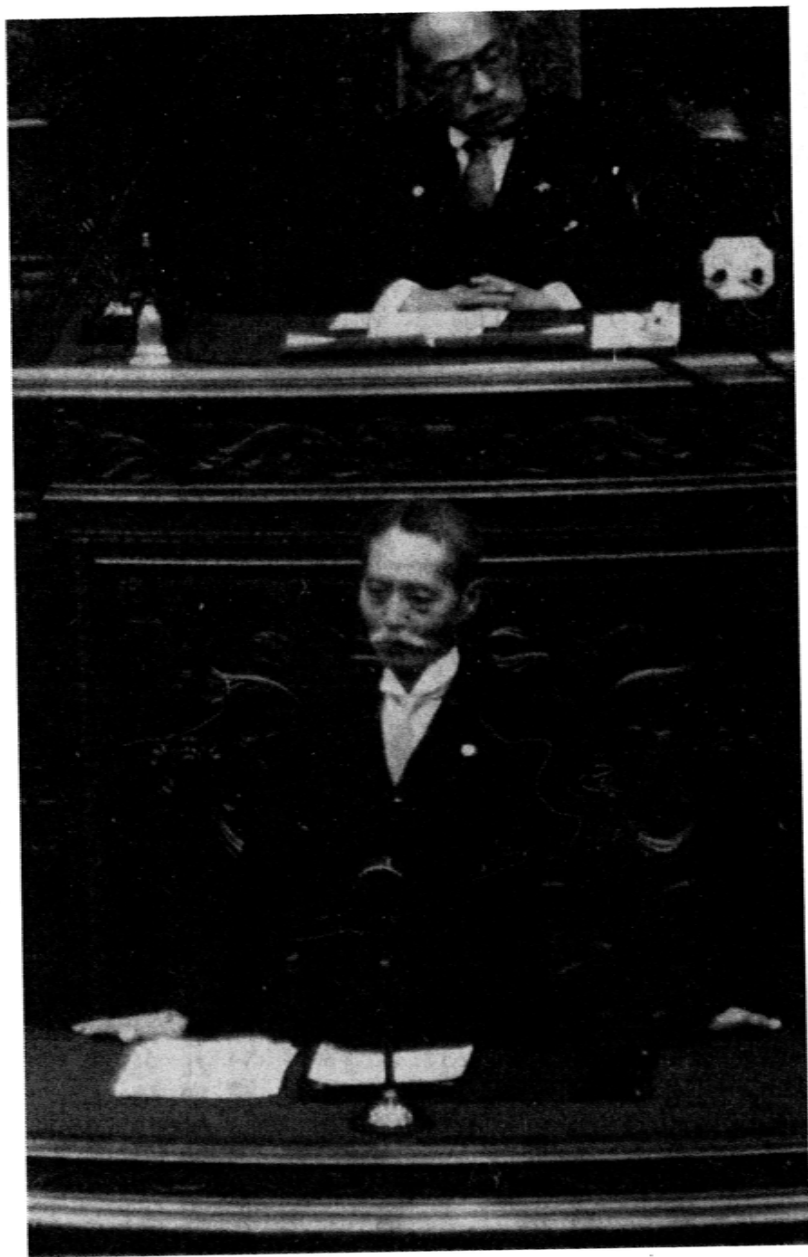
くらいのものだった。私のおこなつた演説の大意は次のとおりである（速記録による）。

第一に国防の増加の理由を承りたい。これまで当壇からお述べになつた政府および議員の方々のご説を聴いても、国防費の増大は現在の内外の情勢においてやむをえぬということを、たいていおっしゃるようであります。私にはそのやむをえぬ理由と根拠がわかりませぬ。（中略）内外の情勢やむをえぬとすれば、もう国防費は今後ますます増加するばかりであり、したがつて財政経済は困難におもむき、国民全体みなその生活の不安を感じるようになることは、本員保証いたすのであります。

第二には、そのやむをえぬという内外の情勢は、内から起ころところの情勢であるか、ただしは外から来るところの情勢であるかを承りたい。（中略）それがわからなければ転回しようと思つても、転回の途はない。

第三には、そのやむをえぬ事情が外から来るとするならば、国防関係のものはいずれも軍事であります。陸から来るところの外国の関係は、陸軍をもつて防がなければならず、海から来るべき予想があるならば、海軍をもつて防がなければならぬ。相手がいずれかから来るかも知らないで、ただ防禦の途を講ずるのだということでは、本員においては絶対に理解ができないのであります……。（中略）

（四、五、六略）



昭和12年2月17日 死を覚悟した演説  
(うしろは富田幸次郎衆議院議長)

②

第七には日独協定の結果はどうなるかというお見込みをうかがいたい。(中略) 日独協定は、これがためにロシアにたいする影響はどうなるかということをも真つ先に考えなければならぬ(中略) ほとんど救うべからざる結果に陥るかもしれないことを心配したのであります。だいたいからいえば、日独協定はドイツにはたしかに有利であります。われに有利なゆえんを本員は解する能わざる者であります。

第八番目には、いちばん大きい問題、帝国の方針はなんであるか、日本帝国はどこに行くつもりでいまの政府は舵を取っておるのか、それがわかりませぬ。(中略) 帝国はおおいに発展せなければならぬが、その発展は武力を主として発展するか、あるいは経済的發展を主とするかくらいの方針は定まっておらなければならぬ。武力と経済と両方ともに発展するというのも、時あつてできますけれども、多くの場合においてはできないことでもありますから、両方するにしても国家の方針、すなわち国是としてはいずれに重きを置くかというくらいの方針は定めておかなければなりません。その方針はどれであるか。これを他の言葉でいえば、国是を發展せしむるには北のほうに發展せしむるつもりか、南のほうに發展するつもりであるか、大陸を相手にするのか、海洋を相手にするのか、そのくらいのことをせなければ、ほとんど夢遊病者がうろついて歩くような状態でまったく国の方針なく、あるいは北に向かい、あるいは南に向かい、大陸に手をつけるかと思うと、海洋にも伸びんとする。それでは国はどうてい目的を達することはできませんから、この国是に関する大方針をぜひ承りたい。